# 4-⑤ どうすれば悲哀はやむのか

<どうすれば悲哀はやむのか>

-このままの状態から逃げずにいる

苦しむ人々は、荒れくるう川に沿って住んでいる一群の人々に皆えられる。いま提防が決壊しかかっている。

一人は言う、「ぼくはこの家に残って、切手意集に熱中していれば、それで巡れられるよ」。もう一人は考える、「おれは情事に我を忘れて、それで逃避してしまおう」

第三の男は言じる、「わたしが他の人々のために善いことをして回われば、川はわたしを呑みこまないだろう」と。

どの人もポイントを逸している。人類もまさにこのようである。洪水は内部にあるのだ。われわれの注意と努力の注がれるべき場所はそこだけだ。それ以外の行為はすべて危険な気散じに過ぎない。

ある方向へ眼をかけながら、別の方角へ歩いているようなものだ。

妻または夫、友達、よい評判、快適さ、幸福、その他なんでもいい、ある種類の失に悩むとき、われわれはいかにすべきか? まず最初の衝動は、あなたが失ったものの代替物を追いかけて、あなたの頭痛から逃れることであ

だがこれらはどれも間違っている。遅かれ早かれ、この行為はあなたをより深い絶望へ陥しいれるにきまっている。代替物を追いもとめること自体恐ろしい足掻きである。あなたが静かに自己観察をおこなえば、不安を逃れ

とすればあなたの為さねばならないことはきわめて簡単である。それが喪失に対するあなたの習慣的反応に逆行するから、最初は難しいことに思えるかもしれない。あなたは喪失のとき、あなたの新しい、慣れない状況へ、

こうした純粋な驚きの状態にいるとき、あなたは奇的な変貌を可能にするのである。

外部の状況は変るかもしれないし、変らないかもしれない、だがそれは重要ではない。奇は外部世界で起こらない、内部の世界で起とるのだ。あなたが寄質である。そうなれば、もはや爽失というようなものは再び起とらな

霊的な眠りの呪縛から解かれたいと心底から望む人々は、特殊な型の苦しみに出合う。秘教文学でしばしばいわれる「たましいの闇夜」がそれである。これはウィリアム・ブレイク、マイスター・エックハルト等の神秘思想

われわれが最初、自分の仮装、自分の虚しさを感じたとき、この苦しみは始まる。われわれ自身のイカサマと意識的に対決させられると、われわれは戦標する。われわれは参禍の淵に、ひとりぼっちで、裸で立っているよう

われわれがなにか新しいことを学ぶことのできるのは、この内なる虚しさからだけでしかない。だが最初から、われわれは意識的でなければならない。そうだ、痛いまでにこの虚しさを意識していなければならない。充実し

---

Revision #2
Created 18 October 2024 02:29:01 by ゆう
Updated 27 October 2024 05:49:59 by ゆう